

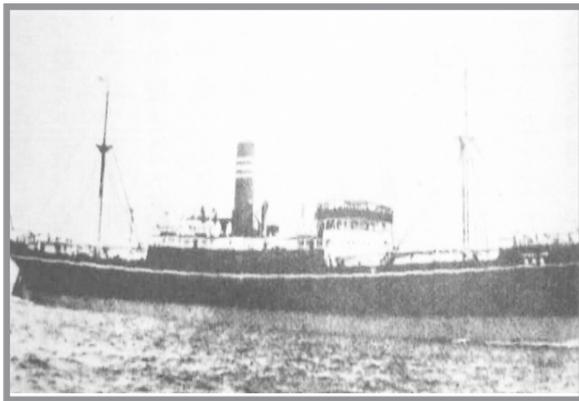
特集 宮古島における戦中の学童疎開

〜後世に語り継ぎたい記憶〜

宮古島市における戦災の状況

最初の空襲

昭和19年10月10日午前7時30分、宮古島南方上空に見慣れない機影が編隊を組んで現れました。秋晴れの平良町上空でそれは東西に分かれ、飛行場方面と漲水港へ急降下。間もなくサイレンが鳴り銃撃音・爆撃音がこだまして対空砲が応戦しても、「友軍機の演習が実戦さながらに行われているのだらう」と多くの町民が空を見上げていました。



▲ 那覇国民学校の生徒らが乗っていた学童疎開船「対馬丸」

続いて午後2時5分第2波、延べ19機による空襲。漲水港沖合に停泊中の広田丸(2,211トン)が撃沈されるのを目の当たりに見せつけられました。この「10・10空襲」を皮切りに宮古島は連日のように米軍機の空襲にさらされ、瓦礫の島へ化していったのです。

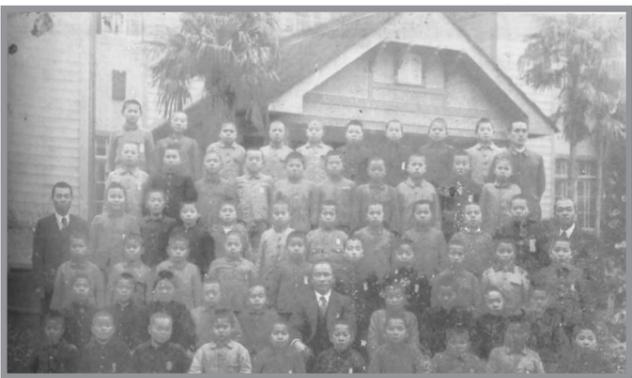
戦災、その後と市民生活

翌年(昭和20年)3月までの宮古島の空襲は、主に軍事目標が狙われていましたが、その後は次第に市街地が狙われるようになってきた。時限爆弾や街を焼き尽くす焼夷弾も用いられるようになり、平良の街は廃墟と化します。

5月に入ると、爆撃が連日続く。陸軍の特攻作戦が本格化するに伴い、その中継基地としての宮古島は狙うに値するものとなってしまったのです。

防衛担当軍の視察で「宮古島は、島全体が平坦で起伏に乏しく、航空基地として最適である」と判断され、用地接收後の3カ所の飛行場が建設されました。

昭和19年12月までに3万人の陸海空軍人が宮古島にひしめくように。急激な人口増などから宮古島では食料不足が深刻化し、慢性の栄養失調は郡民の体力衰弱となり、マリアアの蔓延につながりました。空襲に備えて燈火管制下に置かれた平良町は夜間になると文字通り「暗黒の街」となりました。



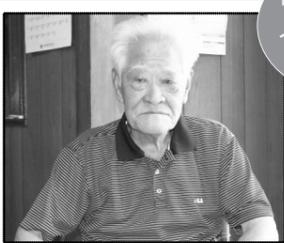
▲ 疎開先「小林町」にて 終戦後の卒業式の様子

学童疎開へ

戦況の悪化に伴い空襲の被害を避けるため、昭和19年8月から疎開が実施されました。児童だけで行われたいわゆる「学童疎開」は、平良第1国民学校から13名、平良第2国民学校から21名、下地国民学校から46名と、各学校から引率教師1名ずつの合計83名。疎開先は、宮崎県小林町(現在の小林市)でした。

- 【参考文献】
 平良市史第一巻通史編1 (先史〜近代)
 平良市史第四巻資料編2 (近代資料編)

体験者インタビュー その1



上地 幸栄さん(85)

小学校5年生の時に学童疎開を経験。約1年6カ月の間、宮崎県小林町で生活した後、宮古島に帰郷。小林町(現在の小林市)の人々との交流は現在に至るまで続いている。

学童疎開体験者が語る 疎開の実態とは



体験された学童疎開について教えて下さい。

昭和19年8月に、学童疎開船「大徳丸」で宮古島から出港した。航路は、那覇→名護→鹿児島→那覇の順に船で渡った。宮古から鹿児島まで約1週間の船旅。途中、鹿児島に着く頃に、那覇国民学校の生徒らが乗っていた「対馬丸」が撃沈された知らせを聞いた。その後、鹿児島島の旅館で1週間程過ごし、それから宮崎県小林町に向かった。小林町に着いてからは、40名程の生徒と引率の先生と一緒に、小林町内にある青年学校の校舎を借りて共同生活を送った。寝るときは全員でこも寝していた。宮古島と違い、宮崎県は氷が張るほど寒く着るものも無くてびっくりしたこと覚えてる。向こうで「いじめ」にはあわなかったが、とにかくひどい思いをした。ご飯の上に梅干し1個を

乗せただけの「日の丸弁当」とたくわん2切れが朝食兼昼食。夕食はおじやにモギやセリを入れて食べていた。お風呂は銭湯に通っていたが、お金がかかるので毎日に行けなかった。洋服に「しらみ」が湧くのもつらかった。疎開から1年後に家族と合流し小林町内の田舎の方に移動した。田舎で空いている民家を借りて畑仕事や農家の手伝い等をした。田舎の方が食べ物が豊富だったことを覚えている。

――疎開中、一番大変だったことは何ですか？
 一番大変だったのは、寂しかったこと。自分の家に帰りたい気持ちがすごかった。

――終戦後、家に帰ることが出来るようになった時はどんなお気持ちでしたか？
 終戦を知ったのは、先生が持っていたラジオからポツダム宣言の知らせが流れてきた時。家に帰ることが出来るようになった。嬉しかったがなごうた。でも、戦後のごたごたですぐに帰ることは出来ず、終戦後もしばらくは小林町で過ごしていた。宮古島に帰ることが出来たのは、それから7ヶ月後の昭和21年2月だった。

体験者インタビュー その2



湧川 弘一さん(86)

小学校6年生の時に学童疎開を経験。宮古島に帰郷後、疎開中にお世話になった小林町の人々へお礼のために、10名くらいて再び小林町を訪れている。

体験された学童疎開について教えて下さい。

小林町に行くまで最初の1年間は、青年学校の校舎で寝泊まりしていた。食べ物も少なく、おむしも多かった。校舎裏の竹林に兵舎があつて、そこにあった焦げ飯なんかを食べていたこともあった。地元の人々も良くしてくれて、食べ盛りの子ども達のために差し入れをしてくれたりした。疎開から1年が経つと、配給される食料では間に合わなくなつて、小林町の田舎の方に移動した。田舎では農家の畑を借りて手を植えたり、農業の手伝いをした。疎開中の小林町では、終戦前に一度だけ

け銃撃があつたのみでほとんど戦争に巻き込まれていない。また、疎開したおかげで学校にも通うことが出来て、戦争中も勉強を続けることが出来た。小林町の皆さんも本当に良くしてくれました。私は疎開に感謝している。悪いのは戦争であつて、疎開ではないと思う。疎開から帰ってからのほうが食べ物がなくてきつかった。

――疎開中、一番大変だったことは何ですか？

一番苦労したのは、小林町に行くすぐの頃、言葉が通じなかったこと。向こうは薩摩弁を話すものだから、言葉が全然違って、とても苦労した。

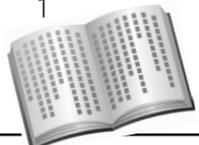
――終戦後、家に帰ることが出来るようになった時はどんなお気持ちでしたか？
 もちろん嬉しかった。でも疎開中、先生からは「宮古島は戦いに巻き込まれていないから無事」と聞かされていたので、漲水の焼け野原を見た時は涙が止まらなかった。

学童疎開とは？

太平洋戦争の末期に、米軍の本格的な空襲に備えて、大都市の国民学校初等科(現在の小学校)の児童を個人または集団で農村地帯に移住させたこと。宮古島は大都市ではなかったが、中継基地としての重要度が高まる中、

空襲の危険性が予見された為、「学童疎開準備二関スル件」という内政部長名の通牒に基づき実施された。

- 【参考文献】
 平良市史第一巻通史編1 (先史〜近代)



上地さん、湧川さん、協力ありがとうございました。